

『三才図会』から『和漢三才図会』へ
—分類と構成を中心に—

From Sansai-zue to Wakansansai-zue:
Focusing on Category and Constitution

楊亜麗

YANG Yai

摘要

《和漢三才図会》は编纂于日本江戸時代の一部百科事典。作者寺島良安效仿中国的《三才図会》，收录了中日两国的事物并以天地人的三大部类对宇宙万物进行分类。《和漢三才図会》虽然是模仿《三才図会》编纂而成的，但是本文通过比较发现，《和漢三才図会》只是在三才分类法和图文并用方面受《三才図会》的影响较大，在项目的分类与整体构成上与《三才図会》存在较大的区别。

キーワード：和漢三才図会 三才図会 分類

はじめに

正徳二年（一七一二）の序を持つ寺島良安撰『和漢三才図会』一〇五巻、首尾各一卷（計八一冊）は、江戸時代の絵入り百科事典である。

寺島良安はどのような意識で『和漢三才図会』を編纂したのか。

寺島良安自らが「自序」に、

概擬三才氏三才図会也。（概ね王氏の『三才図会』に擬ふなり。）

と述べているように、『和漢三才図会』は明・王圻、王思義父子撰『三才図会』の影響を強く受けて成立している。

本稿は『和漢三才図会』が、『三才図会』をはじめとする類書・古辞書の類からどのような影響を受けたのかを構成の上から解明するため、まず、

『三才図会』の成立、日本への伝来とその影響、『三才図会』と『和漢三才図会』の違いをあきらかにすることを目的とする。

一、『三才図会』の成立

『三才図会』は明代に王圻、王思義父子によって編纂された私撰類書である。中国では類書の編纂は古くから行われており、明代に至って発展期を迎えた。明代二七〇余年の間に、官修類書『永樂大典』をはじめ、数多くの類書が編纂された。『四庫全書総目提要』によると、明代の類書として著録はされたものは十三部、存目は百二十部以上を数える^①。また、『中国古籍総目』には、明代類書が四三九部著録されている^②。

明代に類書が発展した要因について、張雲瑾氏は、次の三点を指摘された。第一に、宋・明代には、彫版印刷技術の普及によって、書物の編纂と出版が大きく発展したこと、第二に、唐宋以降、科挙制度の一般化によって、科挙受験のために古書を抄録した類書が続々と出版されたこと、第三に、明代には手工業と商品経済の発展によって、市民階層が拡大し、皇帝・士大夫のほかに、庶民も類書の読者となったことである^③。

このような類書が発展期、明代に『三才図会』は王圻、王思義父子によって編纂されたのである。

父の王圻は嘉靖四四年（一五六五）に殿試に合格し、学問を好み、著書には『三才図会』以外に『続文獻通考』『稗史類編』『雲間海防志』『東吳水利考』等がある。子の王思義にも、『香雪林集』『宋史纂要』等の著書がある。

『三才図会』は父子の合作で、万曆三五年（一六〇七）に完成し、同三七年（一六〇九）に刊行された。『三才図会』の構成は、まず、宇宙全般を天地の「三才」、すなわち「天」部、「地」部、「人」部に分類する。さらに、これを十四の小部門に分けて、「天」部は「天文」四巻、「地」部は「地理」十六巻、「人」部は「人物」十四巻・「時令」四巻・「宮室」四巻・「器用」十二巻・「身体」七巻・「衣服」三巻・「人事」十巻・「儀制」八巻・「珍宝」二巻・「文史」四巻・「鳥獸」六巻・「草木」十二巻から成る。

「天文」「地理」「人物」は父の王圻の撰であり、「時令」以下はすべて子の

王思義の手になる。王思義は、全体の校正作業も行った。

『三才図会』は、各項目を解説文と図によって説明する。その配置は、左に図・右に文、もしくは上に文・下に図という体裁をとる。全一〇六巻に収録した挿絵は、六一二五図に及ぶ。挿絵を多く使用して図像に重点を置くのは、本書の最大の特徴とされる。

王圻は『三才図会』「自序」において、図像のもつ役割について次のように述べている。

図画所以成造化、助人倫、窮万變、測幽微、蓋甚哉。(図画は造化を成し、人倫を助け、万変を窮め、幽微を測る所以にして、蓋し甚だしきかな。)

王圻にとって、「図画」とは人間の倫理をたもち、宇宙の奥義を究明する重要な存在であった。王圻は、当時の図像の使用状況について、次のように嘆いている。

今、書可汗牛、而図不堪飽。(今、書は汗牛たるべきも、而も図は飽くに堪えず。)

当時、膨大な書物が編纂されていたにもかかわらず、書物の中に図像が収録されることは少なかった。このように画像が重視されていない状況を、王圻は憂慮して、『三才図会』の編纂方針を、次のように定めた。

図絵以勸之于先、論説以綴之于後、図與書相為印証。(図絵は之を勸するを以て先とし、「論説」は之を綴るを以て後とし、「図」と「書」と、相ひ印証と為す。)

このため、『三才図会』では、「図」を先に掲出し、「書」、すなわち説明文を後に記す。「図」は補助的な役割にとどまるのではなく、文章と同じように事物を説明する主役として存在するのである。

これらの図像の源流、出典について、王圻は次のように説明している。

余、少年従事鉛槧、即艶羨圖史之学。凡璣衡、地域、人物諸象繪靡不兼收、而季思思義頗亦棲心往牒、広加蒐輯、図益大備。(余、少年にして鉛槧に従事し、即ち図史の学を艶羨す。凡そ璣衡、地域、人物の諸象の絵は兼ねて収めざること靡く、而して季思の思義は頗る亦心に棲み牒を往き、広く蒐輯を加へ、図は益大いに備はる。)

王圻は幼い頃から「図史之学」に関心を寄せ、その重要性を認識していた。また、天下の万物を網羅すべく、意識的に図像の収集に力を入れた。子の王思義も、父の志を継いで図像を収集した。父子二人の数十年の積み重ねによって、『三才図会』には数多くの図像が収録されたのである。

二、『三才図会』の日本への伝来とその影響

王圻、王思義父子の撰になる『三才図会』は、明代、広く流布した。俞陽氏によると、『三才図会』には三種類の版本がある⁴⁾。また、大庭脩氏の研究によれば、『三才図会』は寛永十六年(一六三九)に、初めて日本に伝来し、その後、江戸時代を通じて、しばしば輸入され、日本の絵入り百科事典に大きな影響を及ぼした。

寛文六年(一六六六)、日本最初の絵入り百科事典である中村楊斎撰『訓蒙図彙』が刊行された。『訓蒙図彙』二十巻は、「天文」「地理」「人物」以下十七部から成り、収録する項目数は一四八四項目を数え、一つの項目に各一図を配して短い解説を付す。解説を付けない場合もある。

『訓蒙図彙』「凡例」には、その引用書について次のように述べる。

引証ノ之図書、漢一、字ハ、以三才一図一會、農一政一全一書及諸一家ノ本草ノ之図一説ヲ為レ主ト。(引証の図書、漢字は『三才図会』『農政全書』、及び諸家の本草の図説を以て主と為す。)

ここに書名が挙げられていることから、『三才図会』が『訓蒙図彙』の主要な出典とされたことが確認される。『三才図会』は、画期的な日本の絵入り百科事典『訓蒙図彙』を生み出す母胎として働いたのである。

さらに、『訓蒙図彙』刊行の四十六年後の正徳二年(一七二二)、日本最大の絵入り百科事典『和漢三才図会』が完成する。林羅山の孫にあたる朝散大夫大学頭藤原信篤(林鳳岡)は、『和漢三才図会』「序文」において、これを高く評価し、次のように述べている。

翰一林一院編一修記一注起一居玉一峰ノ願乗謙カ所ノ撰三才一図一會、行レ於世ニ便アルニ于用ニ尚シ矣。願レ其ノ為レ書、上自リ二天一文ニ下至リ二地一理ニ、中及ヒ二人一物ニ、旁々速ク二器一用一時一令・

宮一室・身一體・衣一服・人一事・文一史・珍一宝・禮一制ニ・細ニメハ而天一喬、蠶ニメハ而羽一毛鱗一介。經一史子一集及一稗一官小一史、所載スル、靡シレ不ト云フ、ニ旁ク搜リ述ニ覽。字一櫛・句一比・区一分・臚一列務テ極ル、其耳一目ノ之所レ加、神一識ノ之所レ詰ル者也。(翰林院編修記注起居玉峰の顧秉謙が撰する所の『三才図会』、世に行はれ用に便あること、尚し。其の書を為ることを顧みれば、上は「天文」より下は「地理」に至り、中は「人物」に及び、傍く「器用」「時令」「宮室」「身體」「衣服」「人事」「文史」「珍宝」「禮制」に達ぶ。細にしては天喬、蠶にしては羽毛鱗介。經史・子集及び稗官・小史の載する所、旁く搜り述に覽ざると言ふこと靡し。字櫛・句比・区分・臚列、務て其の耳目の加ふる所、神識の詰る所を極むる者なり。

さらに、『和漢三才図会』の撰者・寺島良安は「自序」において、『和漢三才図会』と『三才図会』の関係について、次のように述べている。

「函一丈和一氣法一眼伸一安、謂レ予ニ曰ク、劉一完一素有レ言ヘル、レ欲ル為レ「レ醫者」者、上知ニ天一文一、下知ニ地一理一、中知ニ人一事一、レ三ノ者俱ニ明ニ、然メ後可以レ語ル人ノ之疾一病一。不レ然ラ、則如ニ無レ目夜一遊、無メ足登一涉スルカ也。予聽テ師之教一誨一、拳拳服膺ス。因レ茲レ不レ願ニ不レ敏一、執ル藥一匙一之暇ニ、涉ニ獵和一漢之黃一巻一、レ復ニ求スル「耳一學口一碑」之者一、凡ニ三十有レ余一年。有ニ所一證レ者靡レ不ト云フ、レ畢ク記中其要一領上、有ニ形色一者、各為ニ畫一圖一、方ニ今書成ニ、百一五一卷。概擬ニ王一氏ノ三才一図一會一也。(函丈和氣法眼伸安、予に謂ひて曰く、「劉完素言えること有り、醫を為さんと欲する者は、上は天文を知り、下は地理を知り、中は人事を知り、三者俱に明らかにして、然して後、以て人の疾病を語るべし。然らざれば、則ち目無くして夜遊し、足無くして登渉するが如きなり」と。予、師の教誨を聴きて、拳拳服膺す。茲に因りて、不敏を顧みず、藥匙を執るの暇に、和漢の黄巻を涉獵し、耳學・口碑の者を覓求すること、凡そ三十有余年。所證有る者は畢く其の要領を記さざると云ふこと靡く、形色有る者、各画図を為して、方に今、書成つて百五巻。概ね王氏の『三才図会』に擬ふ

なり。)

これによれば、寺島良安の『和漢三才図会』編纂の動機は、師の和氣仲安に「医者になるためには天地人の『三才』を全て把握しなければならぬ」と教えられたので、三十余年をかけて資料を収集し、「耳学」「口碑」の知識を積み重ねて、明の『三才図会』に倣って『和漢三才図会』を編纂したという。『三才図会』は、『和漢三才図会』の編纂の模範となり、『和漢三才図会』に多大な影響を与えたのである。

三、『三才図会』から『和漢三才図会』へ

寺島良安は『三才図会』の「三才」の分類を継承した。しかし、『三才図会』の「三才」の順序が天・地・人であるのに対して、『和漢三才図会』では「三才」の順序は天・人・地になっている。また、『三才図会』と『和漢三才図会』の構成は、必ずしも一致していない。

『和漢三才図会』は、『三才図会』同様、全体を天人地の「三才」、天部(巻一～六)、人部(巻七～五三)地部(巻五四～百五)に分類し、和漢の事物を収載する。さらに、「三才」の下位分類として、「天文」「人倫」から「禽獸」「草木」にいたる百五の部類に分け、掲出項目は五一八一におよぶ。

『和漢三才図会』の部立と分類は、『三才図会』のそれにどのように対応するのであろうか。

(一)『三才図会』と『和漢三才図会』の部立と分類

『和漢三才図会』の部立と分類は、『三才図会』のそれにどのように対応するのであろうか。

表1は、『和漢三才図会』の部立を基準として、『三才図会』の部立と分類を対照して示したものである。両書の構成は異なっており、厳密には対応しない点もあるが、おおよそ類似するものを対照して示した。

表1から、次のことが確認される。

第一に、両者の概念階層のちがいである。『三才図会』天・地・人の「三才」を十四の類に分け、その下位分類にはほとんど部立の名称を付さない。

表1・『和漢三才図会』と『三才図会』の部立と分類

『和漢三才図会』		『三才図会』	
天	人	天	人
1 天部、2 天文、3 象類 4 時令類、5 曆占類、6 曆折日神	7 人倫、8 親属	天文四卷 卷一〜四天文	卷一〜四天文
9 官位	10 人倫之用	時令四卷 卷一〜四時令	卷一〜四時令
11 經絡、12 支體	13 異国人物、14 外夷人物	人物十四卷 卷一〜十四人物	卷一〜十四人物
15 芸財、16 芸能、17 嬉戲類	18 樂器、19 神祭佛具	人事十卷 卷一〜十人事	卷一〜十人事
20 兵器 <small>防備</small> 、21 兵器 <small>征伐</small>	22 刑罰具、 23 魚獵具、 24 百工具、25 容飾具、26 服玩具、	器用十二卷 卷六〜八兵器類	卷六〜八兵器類
27 絹布、28 衣服、29 冠帽、30 履襪	31 庖厨具	器用十二卷 卷十二 衣服三卷	卷一〜三衣服
32 家飾具、	33 車駕具、	器用十二卷 卷十二 什器類	卷十二 什器類
34 船橋類	35 農具、	器用十二卷 卷五 車輿類・漁類	卷五 車輿類・漁類
36 女工具		器用十二卷 卷四 舞器・射候・舟類	卷四 舞器・射候・舟類
		器用十二卷 卷十 農器類、卷十一 卷九 蠶織類	卷十 農器類、卷十一 卷九 蠶織類

×	×	地															
		×		穀菽類	草類	果部	木部		金石部		虫部	魚部	介甲部	龍蛇部	禽類		
×	105 造釀	103 穀類、104 菽豆類	100 麻菜類、101 芝柶類、102 柔滑類、	97 水草類、98 石草類、99 葷草類	92 山草類 _{藥品} 、93 芳草類、94 木末 _{草木} 、95 湿草類、96 毒草類、97 蔓草類、	86 五果類、87 山果類、88 夷果類、89 味果類、90 麻果類、91 水果類	82 香木類、83 喬木類、84 灌木類、85 萬木類 _{附豆苞木}	81 家宅類	62 63中華、64 80日本地理	59 金類、60 玉石類、61 雜石類	55 土地類、56 山類、57 水類、58 火類	52 卵生蟲、53 化生蟲、54 湿生蟲	48 有鱗魚 _{河湖} 、49 有鱗魚 _{江海} 、50 無鱗魚 _{河湖} 、51 無鱗魚 _{江海}	46 介甲 _{蟲蟹} 、47 介甲 _{蝦蛤}	45 龍蛇類	41 水禽、42 原禽、43 林禽、44 山禽	37 畜類、38 獸類、39 鼠類、40 禽類
						人	人	地	人	地							鳥獸六卷
文史四卷	儀制八卷					草木十二卷	宮室四卷	地理十六卷	珍宝二卷	地理十六卷							卷三、四獸類
卷一易圖·附擬玄圖·皇極經世圖、卷二詩經圖·書經圖·札記圖·周禮圖、卷三春秋圖·廻文圖·詩餘圖譜上、卷四詩餘圖譜中·下	卷一、八儀制	×	卷十一菓類·穀類	卷十蔬類	卷一、七草類	卷八、九木類、	卷一、四宮室	卷一、十六地理	卷一、二珍宝	卷一、十六地理						卷五、六鱗介類	卷一、二鳥類

ただし、「器用」「文史」「鳥獸」「草木」の四類に限っては、例えば「器用」の「卷一古器」「卷二古器類」「卷三樂器類」のように部立の名称を記す。これに対して、『和漢三才図会』は天・人・地の「三才」を一〇五の部類に分け、その下位階層に「部」「類」の部立の名称を付す。

『和漢三才図会』の「部」「類」という分類概念は、全巻を通して統一されているわけではない。このように『和漢三才図会』の階層が整合性をもたないことについては、相田満氏の指摘がある。

整齐された階層関係で貫かれているわけではなく、必ずしも行儀のいいものとはいえない。「部」や「類」といったものがきちんと巻々の冒頭に階層的整合されて配列されていない。

第二に、両者の最も上位の分類概念「天」「地」「人」は、大きく異なる。巻数の比率をみると、『三才図会』の「天」「地」「人」の巻数の比率は4・16・86である。一方、『和漢三才図会』の「天」「人」「地」の巻数の比率は6・51・48である。

次に、「天」「地」「人」の概念、ひいては部立の構成のちがいである。

『三才図会』「天」部は四巻、部立は「天文」のみであるのに対して、『和漢三才図会』「天」部は六巻、その部立と内容は次のようになっており、その範疇は広範におよぶ。

「天文」 1 天部、2 天文、3 天象類、

「時令」 4 時候類、5 曆占類、6 曆折日神

『三才図会』「人」部の「草木十二巻」「宮室四巻」「珍宝二巻」を、『和漢三才図会』はすべて「地」部に分類する。また、『三才図会』「人」部「儀制八巻」「文史四巻」は、『和漢三才図会』に相当する部立はない。このように、両書の「三才」の概念と部立の構成は異なっている。

第三に、表1「三才図会」「人事十巻」「器用十二巻」「地理十六巻」に示したように、両者の部立の配列は異なる。

例えば、『和漢三才図会』「人」部には、第二階層の部立名がない。7「人倫」、8「親屬」、9「官位」は、『三才図会』「人物十四巻」に対応する。10「人倫之用」は、『三才図会』「人事十巻」、11「経絡」、12「支體」は、『三才

図会』「身体七巻」、13「異国人物」、14「外夷人物」は、『三才図会』「人物十四巻」に対応する。

さらに、両者の部立の巻数は大きく異なる。例えば、『三才図会』「身体」は七巻であるが、『和漢三才図会』には「身体」に該当する部立がなく、「経絡」「支體」二巻で構成されている。

このように、『三才図会』を主たる典拠としながら、『和漢三才図会』の構成、部立の配列は、『三才図会』とは大きく異なる点が見られるのである。

(二) 『和漢三才図会』の項目の配置

『三才図会』と『和漢三才図会』は、項目内の記事の配置も異なる。『三才図会』は左が図・右が文、もしくは上が文・下が図という配置であるが、『和漢三才図会』「凡例」は配置について次のように述べる。

物一物図ニ形一状一ヲ、書ニ名一目一ヲ、下ニ記ニ異一各一ヲ、右ノ傍以ニテ倭字一著ニ和一各一ヲ、左ノ傍以ニテ偏假一各一ヲ、附ニテ唐一音一ヲ、令ニテ童一蒙一易上レヲ見。 (物物は形状を図して、名目を書し、下に異名を記し、右の傍に倭字を以て和名を著け、左の傍に偏假字を以て唐音を附け、童蒙をして見易からしむ)

「凡例」によれば、『和漢三才図会』は、図像を右上に配置し、図像の下に「名目(掲出語)」を記し、その下に異名、右傍に和名をかなで示し、左傍に唐音を付す。類義語等を付すこともある。さらに、左に種類・産地・用途等の解説を施す。こうした『和漢三才図会』の項目の配置は、『三才図会』の形式を踏襲せず、前例のない独自の様式となっている。

(三) 『和漢三才図会』の以呂波順「小目録」

『和漢三才図会』最終巻「尾」一巻には、いろは順の「小目録」一巻が付されている。このような目録は『三才図会』にはない。この「小目録」について、寺島良安は「凡例」で次のように述べ、従来の分類方法では分類しにくい項目の扱い方を説明している。

若下^{キセンサカ}麗春花^ハ則入^ニ穀一部^ニ、阿一仙一薬則入^ル蟲一部^ニ之類^上、甚麼^{イツレカキ}巨^レ

叩者衆 別ニ有ニ一巻ノ小目一録、用ニテ以一呂一波假一字類一宇一ヲ便ニリス于
一「一覽」ニ。(「麗春花」は則ち「穀」部に入り、「阿仙菓」は則ち「蟲」部に
入るの類の若き、甚麼に乱へ難き者衆し。別に一巻の「小目録」有り、以呂
波・假字・類字を用ひて、一覽に便とす)

これによれば、「麗春花」を「穀」部に、「阿仙菓」を「蟲」部に配した。『和
漢三才図会』には、このように分類しにくいものが多いので、読者が利用し
やすいように、いろは順の索引「小目録」を一巻作つたという。

「小目録」は全体を「乾坤」「人物」「肢体」「氣形」「食服」「器財」「金
石」「草木」の八類に分け、各類はいろは順で項目を配する。マティアス・
ハイエク氏は「和漢三才図会」がいろは順を採用したことに注目し、次のよ
うに高く評価された。

この小目録こそ、本書と『三才図会』の根本的な相違点であり、本書最大
の特徴の一つともいえる。

このいろは順の配列の先例は、平安末期の分類体の古辞書『色葉字類抄』
にも見られ、日本独自の類書の分類法として注目されてよい。

むすび

寺島良安は『三才図会』を範として、日本最大の絵入り百科事典『和漢三
才図会』を編纂した。以上、『三才図会』に対して、それとは異なる『和漢
三才図会』の特徴を確認してきた。

両書はともに「天」「地」「人」の「三才」のもとに、森羅万象を網羅する
が、「天」「地」「人」の概念、範疇はそれぞれ異なる。これを反映して、両
書全体の分類と部立の配列も大きく異なっていた。

また、両書は同じく図像を重視しているが、図の配置と本文の配置も異な
る。

さらに、日本の「三才図会」をめざした『和漢三才図会』の最大の特徴
は、巻末にいろは順の「小目録」を設けて、日本の古辞書の分類法を採用し
た点に顕著である。

こうした観点から、引き続き、『和漢三才図会』の分析を続けていきたい。

注

- (1) 『四庫全書総目提要』(河北人民出版社、二〇〇〇年三月)
- (2) 『中国古籍総目』(上海古籍出版社、二〇一〇年十二月)
- (3) 張雲瑾「中国類書的發展歷程」(齊齊哈爾大學學報(哲學社會科學版)、
二〇〇四年一月)
- (4) 兪陽「『三才図会』研究」復旦大学 碩士論文(古典文献学)(二〇〇三
年)を参照。『三才図会』の伝本には、明代万曆三十七年(一六〇九)
「男思義校正」本、明代崇禎年間(一六二八～一六四四)「曾孫爾寶重
校」本、清代康熙年間(一六六二～一七三二)「潭濱黃晟東曙氏重校」
本の三種類がある。
- (5) 大庭脩『船載書目』(関西大学東西学術研究所、一九七二年一月)を参
照。寛永十六年(一六三九)から『三才図会』が続々と日本に伝来し
た。
- (6) 相田満『和漢古典学のオントロジー』(勉誠出版、二〇〇七年二月)
- (7) マティアス・ハイエク『近世日本の百科思想の芽生え—和漢三才図会
の構成と出典の一考察—』(『集と断片』類聚と編纂の日本文化)、勉誠
出版、二〇一四年六月)